くても、世論をあおることによって小沢さんは検察審査会で強制起訴されるだろう……。これは取り調べの時、当時の吉田正喜・特捜部副部長が私に話していたことです。結局、一連の事件は『小沢一郎抹殺』へのストーリーだったのです」

石川氏は今、そう淡々と振り返る。小沢氏の資金管理団体・陸山会の土地購入をめぐり、事務担当者で私設秘書だった石川氏は政治資金収支報告書にウソの記載をしたとして、会計責任者で元公設第1秘書・大久保隆規氏や元私設秘書・池田光智氏とともに政治資金規正法違反の罪で逮捕・起訴された。東京地裁は6月30日、「石川氏が小沢氏らに虚偽記載を報告し、了解を得た」とする検事調書などを却下。検察側は7月20日、石川氏に禁錮2年▽池田氏に同3年6月▽大久保氏に同1年を求刑した。だが9月26日の判決では「特捜大惨敗」の可能性が高い。

捜査の焦点となった陸山会の土地（東京都世田谷区）

事件の背景には、中堅ゼネコン・水谷建設（三重県桑名市）から受け取った5000万円を隠す意図があったというのが検察側の主張。石川氏らは一貫して現金授受を否定し、無罪を訴えてきた。裏金の授受がなかったとすると、本当の「動機」は何だったのか。

石川氏は「小沢さんが民主党代表選に出馬する環境を整えたかった」と言う。

「もし（04年10月に小沢氏から借りた4億円で買った土地の購入日を）そのまま政治資金収支報告書に記載していたら、04年分の報告書は05年9月に公表される決まりでしたから、その時点でマスコミに騒がれていたかもしれません。そこで司法書士に確認したところ、『登記を延期しても大丈夫（合法）』と言われたため、登記日を05年1月にずらし、公表は06年9月になった。事実、小沢さんは06年4月に代表に就任しているので、私の判断は正解だったわけです。結果論と言われるかもしれませんが、そこは（秘書としての）動物的な勘ですね」

「小沢首相」への〝漠とした不安〟

これまで「最強の捜査機関」と呼ばれてきた特捜検察。大阪地検特捜部による証拠改ざん事件を受け、笠間治雄検事総長は「独自捜査」の縮小を打ち出した。

「陸山会事件で2人、西松建設事件で1人、計3人の特捜検事の調べを受けました。彼らはかなりの給料をもらっているので汚職事件は起きません。『特捜検察は世の中の浄化装置だ』ということを理解してもらいたい』というのが最大のモチベーションなのです。しかしそれが行き過ぎると、笠間総長の言うように政治家を捕まえるための機関になってしまい、大きな成果を上げなければならないという強迫観念につながる。その悪い部分が出た典型例が陸山会事件、そして水谷マネー問題でした」

さらに石川氏は、特捜検察の現場が発した衝撃的なセリフを明かす。

「ある検事は取り調べ中に、『小沢を起訴できなかったら、オレたち現場の人間はみんな辞めてやるよ』と言っていました。彼らはそれくらい（小沢氏の立件に）燃えていた。小沢さんとの共謀、つまり水谷建設から裏金をもらい、それを隠蔽（いんぺい）するために登記日をずらしたとする仕組みについて、ぜんぶ小沢さんの指示で実行したというストーリーで事件を組み立てようとしていました」

09年3月の西松建設事件から今年1月の小沢氏の強制起訴まで、捜査は実に2年近くに及んだ。なぜ小沢氏だけが、これほど執拗（しつよう）に狙われたのか。

「検察庁の組織全体の意思だとは思っていません。私の得た情報では、笠間総長（当時は広島、東京両高検検事長）は私の逮捕や小沢さんへの集中攻撃に反対したと聞きますし、ほかにも同意見の高検検事長がいたそうです。では、なぜこうなってしまったのか。ロッキード事件の田中角栄元首相、リクルート事件の竹下登元首相から連綿と続く『反検察』の代表格の政治家としての小沢一郎という存在がある。いわば〝最後の金権政治家〟。その小沢さんが検察について、これまでどういう発言をしてき